

令和4年度第1回習志野市市民協働こども発達支援推進協議会 会議録

1. 開催日時 令和4年7月13日(水) 午後2時00分～午後4時00分

2. 開催場所 習志野市消防本部2階 消防団本部室

3. 出席者

【会 長】 社会福祉法人習愛会理事長 あきつ園統括施設長 大塩 幸雄

【副会長】 センターを利用する者等の保護者 阿部 友理

【委 員】 センターを利用する者等の保護者 遠藤 美里

秋津まちづくり会議 執行役員 会計 奥津 佳奈

津田沼北部連合町会 会長 鷺見 高志

千葉大学 教育学部 准教授 真鍋 健

植草学園短期大学 こども未来学科 児童障害福祉専攻 准教授 田村 光子

習志野肢体不自由児・者 父母の会 あじさいの会 会長 小野寺 明美

習志野市手をつなぐ育成会 理事 伊藤 希実子

習志野市障がい者地域共生協議会 会長 松尾 公平

健康福祉部 主幹 児玉 紀久子

障がい福祉課 課長 奥山 昭子

こども政策課 課長 齊藤 洋介

こども保育課 課長 佐久間 心之

ひまわり発達相談センター 主任指導員 清水 郁乃

指導課 指導係長 近藤 篤史

総合教育センター 指導主事 高橋 大悟 (欠席 1名)

【事務局等】 習志野市発達支援サポートネットワーク会議

会長 家弓 樹也(こども部 主幹)

副会長 大門 賢次(指導課 指導主事)

こども部 部長 小平 修、こども部 次長 相澤 慶一

ひまわり発達相談センター 主査 金子 正博、主査 續 竜太郎、

副主査 田中 真由美、副主査 小副川 礼、

主任主事 大泉 晴香

【傍聴者】 1人

4. 議題

(1) 会議録の作成等

(2) 会議録署名委員の指名

(3) 協議

① 発達に支援が必要な子どもへの取り組みについて(発達支援サポートネットワーク会議での

委員の意見を踏まえて)

② ライフサポートファイルの活用を広める取り組みについて(発達支援サポートネットワーク会議での委員の意見を踏まえて)

③ 市民参加型補助金「かだい提案型」の取り組みについて(きらっといっぽの会)

(4) その他(事務連絡等)

5. 会議資料

資料1 習志野市市民協働こども発達支援推進協議会 委員名簿

資料2 令和4年度第1回習志野市発達支援サポートネットワーク会議議事録(要旨)

資料3、4 障がい理解啓発活動実施事業

資料5 ライフサポートファイルチラシ

資料6、7 ライフサポートファイルに関わる取り組み状況

資料8 「子育てショートあるある」および「ライフサポートファイル」 ホームページ閲覧数

資料9 きらっといっぽの会「子どもの特性を理解啓発」チラシ

資料10 きらっといっぽの会事業概要①

資料11 きらっといっぽの会事業概要②

6. 議事内容

(1) 会議録の作成等

会議録は要点筆記とし、会議名、開催日時、開催場所、出席者氏名、審議事項、会議内容、発言委員名および所管課名を記載したうえで、非公開の審議事項を除く記録について、市ホームページ及び市役所グランドフロアの情報公開コーナーにおいて、公開することが決定される。

(2) 会議録署名委員の指名

大塩 幸雄 会長より、阿部 友理 副会長が指名される。

(3) 協議

- ① 発達に支援が必要な子どもへの取り組みについて(発達支援サポートネットワーク会議での委員の意見を踏まえて)

【(ひまわり発達相談センター 主査) 續 竜太郎】

資料2 発達支援サポートネットワーク会議議事録(要旨)に記載の「あたたかく見守ってください」のポスターについて、令和3年度に実施した啓発活動を今年度も引き続き実施し、啓発の機会をさらに増やせるように検討した。当事者側だけではなく、当事者以外からも御意見を頂けることが増えてきている。

「障がい理解に関すること」については、発達に支援が必要な子どもたちが保育所等で他の子どもと一緒に生活するケースが年々増えている。子ども・保護者・職員がお互いの理解をより深めるために、他機関との連携や、経験を共有していくことの大切さが話し合われた。職員の追加配置を行うだけではなく、支援内容について全体でサポートできる体制の構築を重視している。

学校現場でも多様なニーズがある中で、全てのクラスや学校に寄り添える体制作りに向け、指導主事や臨床心理士による訪問相談等の実施や、保護者の希望や心配に寄り添ったアプローチや相談の機会について話し合われた。職員がしっかりと理解し見守る体制作りの必要性についても意見が交わされ、引き続き職員研修に力を入れていくという事を共通理解した。

また、子育て支援課の専門職員による、幅広い相談に対応するアウトリーチ型の家庭支援の取り組みや、放課後児童会による、支援の必要性の有無にかかわらず一緒に過ごしていく為の環境設定など、子どもたちや保護者が安心して生活していく為の連携や工夫について話し合われた。

資料3 障がい理解啓発活動実施事業は、令和3年度に取り組んだ「あたたかく見守ってください」のポスターを使用した啓発活動実績である。令和4年度も継続的に実施していく。

資料4は、令和4年度に新たにに取り組む活動予定である。引き続き検討していく。

【伊藤 希実子 委員】

アウトリーチ型の相談支援事業を昨年度から開始したとあるが、こどもセンター以外の場所でも実施しているのか。もしくは今後予定があるのか伺いたい。

【習志野市発達支援サポートネットワーク会議会長 家弓 樹也】

アウトリーチ型の支援は、子育て支援課がこどもセンターで実施している。ニーズが表面化しない家庭や、支援のニーズが異なる家庭などを全体的に支援していくために、既存の制度を活

用しつつ、専門の職員が相談を受けて、支援や連携につなげていく。ニーズがあれば、親が立ち寄りやすい他の場所での開催も検討していきたいが、具体的には決まっていない。

【伊藤 希実子 委員】

自分で足を運んで相談をするのは、なかなか難しい。親がいる場所で話ができるアウトリーチ型の支援は、とても良い事業だと思う。

「ニーズがあれば」というのは、誰に要望すればということか。

【習志野市発達支援サポートネットワーク会議会長 家弓 樹也】

この事業を行っている子育て支援課に伝えていただくことになると思う。

【伊藤 希実子 委員】

とても良い試みだと思うので、ぜひ継続していただければいいなと思う。

【大塩 幸雄 会長】

こどもセンターに職員が出向き、親の不安な声を聞く上で、特に気になるようなことはあったか。

【(ひまわり発達相談センター 主査) 續 竜太郎】

子育て支援課に聞いたところ、発達に関しての難しい相談というよりは、子育ての不安感や周りの友達との関係などの相談が多いようだ。不安に思っている方が多くいることを改めて確認をしたということだった。

【大塩 幸雄 会長】

相談をできる機会が増えれば、より多くの人に理解していただけて良いことだと思う。

学校の研修体制は、どのような取り組みをしているのか。

【(指導課指導係長) 近藤 篤史 委員】

特別支援教育を推進していく中で、特別支援学級の充実だけではなく、通常学級を含めた学校全体という視点で考えることが何よりも大事だとまず確認している。その上で、特別支援学級にかかわる教員だけではなく、通常学級の担任向けに特別支援教育の基礎研修を行っている。今年度は5月・8月に行う予定である。研修では特別支援教育のコーディネーターも兼ねて、具体的にどのようなケースがあったのか、お子さんの特性を踏まえたどのような支援が必要か、合理的配慮をどのような形で行うべきなのか、ということをしっかり学べるように考えている。

通常学級を含めた学校全体としての取り組みということを意識して取り組んでいきたいと考えている。

【大塩 幸雄 会長】

学校から指導課に要望があり、学校の研修に出向くのか。

【(指導課指導係長) 近藤 篤史 委員】

指導課から声をかけて、各学校の通常学級の先生に集ってもらい研修を行う。

【大塩 幸雄 会長】

指導課主催の研修に、各学校から主任などの先生が来るのか。

【(指導課指導係長) 近藤 篤史 委員】

通常学級の中で、特にクラスに気になる子どもがいる先生などが各学校から研修に行く。

【田村 光子 委員】

大塩会長の話と少し関連するが、保護者から話を聞くと、子どもが幼児期から小学校に上がる段階で、どういったクラスや小学校に所属するかについて、いろいろな葛藤を抱えながら進学を迎えている人が多いと感じている。

昨年度、特別支援教育についての説明会に参加した。今年度より習志野市では自閉症・情緒障がい特別支援学級を全小学校に設置すると聞き、とても素晴らしい取り組みだと思った。特性のある子の保護者だけではなく、保護者全員に伝えられる機会がないものかなとすごく感じた。

資料2の下段に、「教育相談の中から発達検査に関する相談が増えている。…検査をしたら特別支援教育を受けなければならないのか」とある。いろいろな多くの取り組みをしている中で、壁を乗り越えるような形ではなく、子どもの発達に寄り添えるような指導を行っているという姿勢をどういう形でできるのか工夫していただけたらと感じている。

また、「マスクをつけられません」オリジナルバッチの作成配布とあるが、これもすばらしい取り組みだと思う。オリジナルバッチを市役所で無料配布していることを、幼稚園・保育所・小学校などで知ることができるようになるなど、情報を知るまでに何ステップも必要ではない体制が組まれたらいいと思う。

【(障がい福祉課長) 奥山 昭子 委員】

障がい福祉課で、「マスクをつけられません」ストラップを作成した。きっかけは、感覚過敏研究所という団体が、感覚過敏が理由でマスクがつけられない方向けに「マスクがつけられません」シールをワクチン接種会場に寄贈する取り組みを行っており、習志野市でも配布できないか、という依頼であった。障がい福祉課でもそのシールをいただき、数に限りがあったので購入をし、窓口を設置したが、シールだと1回きりで終わってしまうという意見をいただいた。

そこで、私どもが独自でシールではなくぶら下げるような形で、どなたでも使っていただけるようにストラップを作成した。その間に、伊藤委員にも良い取り組みだというお話をいただいた。現在障がい福祉課やひまわり発達相談センターの窓口で配布している。7月15日号の広報習志野に掲載予定である。ホームページや市職員用の掲示板などにも掲載し、必要な場合はお渡しできる案内をしている。

【(ひまわり発達相談センター主任指導員) 清水 郁乃 委員】

「あたたかく見守ってください」ポスターを市内各所へ掲示してから1年経ったので、市内にある京成電鉄とJRの駅に所長と一緒に挨拶に行き、継続的な掲示をお願いした。

また、大型店舗でも場所を変えながら貼っていただいていることを確認している。どんな声があったか伺ったが、まだ具体的な話はないようだ。ただし、啓発は継続していくことが大切だと思うので、場所を変えながらも、習志野市内のどこかでずっと目にすると思っていただければいいかなと思う。

津田沼北部連合町会が、今年1月にふれあい音楽祭を開催した。その際に驚見委員に大変お世話になった。会場の習志野文化ホールで、「あたたかく見守ってください」ポスターの掲示に御協力いただいた。来場者のアンケートには、「発達に心配のある家族がいるので、このようなポスターが貼ってあると一緒に連れていきやすい」、「ポスターの取り組みは素晴らしい」など、意識がなかった方が意識を向けてくださることに、大変ありがたく思う。

驚見委員に、経緯や皆様の反応を少し伺いたい。

【驚見 高志 委員】

習志野文化ホールで、津田沼北部連合町会主催の高齢者ふれあい元気事業を行った。高齢者支援課の助成金をいただいて実施した。その際に、ひまわり発達相談センターより「あたたかく見守ってください」ポスターを掲示したいという申し出があり、お受けした。5～6枚お持ちいただいた。

回収したアンケートには、「“見守って下さいポスター”他の人の啓発にもなっていいことですね」、「入口にあったポスター、長男が落ち着きがないのであのポスターみたいなのがあると一緒に連れていきやすいです」、「障がいのある人や赤ちゃん連れの方々にもこんな素晴らしい音楽祭を聞かせてあげられる世の中になるといいな」といった、好意的な意見をいただいた。

これに関連して、本日お配りした「つだぬま北部」の冊子を1枚めくるとあるとおり、ふれあい音楽祭を来年1月21日に開催する。文化ホールの建て替えがあると聞いているので、最後に何かをやりたいと思い、第2回目を実施することとなった。皆さんにぜひお運びいただきたい。啓発ポスターの掲示の申し出があれば、委員という立場でもあるのでお受けしたいと思う。

また、津田沼北部連合町会には掲示板が8か所ある。いかにチラシを作り、効率的にアピールして啓発活動をするかが大変重要だと思っているので、私ども連合町会としても、このようなポスター等があれば活用していきたい。ポスターが大きいと掲示板のほとんど占めることになるため、A4のラミネートをしたポスターをお願いする。

【大塩 幸雄 会長】

今年度の実施事業(予定)として資料4に、なるほど習志野で番組作成とあるが、どのように放映する予定なのか。

【(障がい福祉課長) 奥山 昭子 委員】

資料4の「その他」に、なるほど習志野でソーシャルインクルージョンを題材にした番組作成と記載されている。なるほど習志野という、J:COMで放映している広報番組があり、その番組の題材として、障がい理解に繋がるようなものを作成したいと考えている。障害者週間がある12月に合わせて、12月の放映予定である。

「あたたかく見守ってください」ポスターの補足をすると、資料4に障がい福祉のしおりへの掲載が校正中と記載されているが、令和4年度版は完成している。約100ページある中の一部にポスターを掲載している。障がい福祉のしおりは障害者手帳の交付者に配布している冊子で、ホームページにも掲載している。

また、ホームページでの掲載や、テレビモニターで「あたたかく見守ってください」を放映している。今年度の後半の掲載枠を現在調整しているところだが、12月の1か月間は長期間放映をして、空いているほかの月に2週間くらい流してもらう予定としている。

【(ひまわり発達相談センター主任指導員) 清水 郁乃 委員】

津田沼北部連合町会が行ったふれあい音楽祭のアンケートについて、私どもは支援者や関係者という視点で動いてしまうところがあるので、地域住民の貴重な御意見だと思う。

先ほど奥山課長よりなるほど習志野の説明があったが、ひまわり発達相談センターでも11月に「市民協働での発達支援の取り組み」をテーマに放映予定なので、連携して取り組んでいく。

【真鍋 健 委員】

一つ目に、令和3年度第2回の協議会で資料に対する意見を求められた際に、ローカル番組での紹介はどうかということ、私も入れていた。なるほど習志野は、習志野市・船橋市・八千代市のローカル情報がまとめて特定の時間帯に流れている番組で、興味を持って見る人が多いのではないと思う。広報の機会として届けていくのは良いと思う。

二つ目に、障がいやさまざまな配慮について、間接的にいろいろな方に知っていただくことが必要だと思う。直接さまざまな人に会って、「こういう人たちもいるよね」、「こういう配慮が必要だよ」ということを身をもって体験する機会をどれだけ保障できるのか、トータルで見ていく必要があると思う。その機会を少しずつ見つけて探していくことが必要かなと思うが、例えば習志野特別支援学校の生徒が市の中で活躍する機会、学校行事として、そういうところで直接そう市内に出向く機会がどのくらいあるのか。本日川寄委員が御欠席だが、分かるのであれば、分かる範囲で教えていただきたい。

三つ目に、アウトリーチ型の相談支援事業におそらく繋がる話だと思うが、新型コロナウイルス感染症の影響で、悩みを外に出せない方がこの3年でどれくらい溜まっているのかとても気になっている。困っている方が増えているとしても、量や違う形での質も広げていかなければいけないと考えたときに、通常の子育ての広場やひまわり発達相談センターへの相談件数は、コロナの前と後で変わっていないのか、念のため確認させていただければと思う。

【大塩 幸雄 会長】

これまでの協議を、阿部副会長にまとめていただく。

【阿部 友理 副会長】

皆さんから出た意見について、振り返りをしたいと思う。

アウトリーチ型の相談支援事業は、専門の職員がこどもセンターに出向いて支援をする。良い試みがとられているようだ。

真鍋先生からも話があったように、コロナの影響により、子育てをしている親子が、悩みをどの程度外に出すことができるのかについて、検証していく必要があるのではないかと御意見をいただいた。子どもの発達にかかわる支援者は、特に対面による支援の重要性を改めて考えていく必要があるのではないと思う。指導課が主催する特別支援教育の基礎研修については、通常学級のクラスにもいろいろな児童がいるため、先生も悩みがたくさんあると思う。特別支援学級にかかわる先生だけではなく、通常学級も含めた学校全体で考える取り組みを継続してほしい。

自閉症・情緒障がい特別支援学級を全小学校に設置したことについて、市でもいろいろな取り組みをしている。しかし、特性のある子の保護者だけではなく、保護者全体に向けて伝えられる取り組みを改めて考えていく必要があるのではないかと、という意見が田村委員からあった。

「あたたかく見守ってください」ポスターは、かなり認知度が上がってきたと思う。津田沼北部連合町会主催のふれあい音楽祭が来年も開催予定ということなので、できればきらっといっぽの会のポスターも含めて、地域の方の御協力をいただきながら、啓発活動を行っていったらと思う。

「マスクをつけられません」ストラップや「マスクがつけられません」シールを今後も障がい福祉課が取り組んでいく話や、J:COM のなるほど習志野の番組をひまわり発達相談センターと障がい福祉課が連携して作る話があった。

今回出た意見を通して、特定の人だけではなく、全体の問題だという意識で捉えてほしいと思う。

【(総合教育センター指導主事) 高橋 大悟 委員】

先ほど真鍋委員から話があった、習志野特別支援学校で子どもたちが活躍する場面について、先日習志野特別支援学校の説明会に行った際に紹介があった。「コロナ禍ということもあり、外に出ていくことを少し控えている。今年度はできるかなと思ったが、現在少しずつコロナが広がっているので今後検討していきながら。」という話を伺った。

② ライフサポートファイルの活用を広める取り組みについて(発達支援サポートネットワーク会議での委員の意見を踏まえて)

【(ひまわり発達相談センター 主査) 續 竜太郎】

発達支援サポートネットワーク会議で話し合ったことが、資料2に記載されている。

まずライフサポートファイルの配布について、取りに行くことができない人には、郵送するなどの対応を積極的に行っている。

活用事例としては、子どもの情報が一体的に綴られて、所属先や通所先の支援内容に活かされている事例や、障がい福祉課で職員がライフサポートファイルの活用支援をすることで、窓口受付の時間短縮に繋がっている等の事例が挙げた。児童育成課の提案を基に既存の様式を改善した事例では、放課後児童会と関わりのない保護者からも、作成に関する気持ちのハードルが下がったという声があり、今後の活用へ繋がるものと考えている。「子どもたちのために有効なんだ」、「子どもの情報を知りたい」と思うことが、今後も支援者に浸透することが大切であるという意見があがった。支援者側からの積極的な働きかけが行えるように、引き続き支援者への啓発も進めていく。

普及について、啓発チラシや広報習志野を見た人が、子育て支援課や健康支援課に「ライフサポートファイルはありますか」と尋ねてくるが増えている。窓口で職員が話を伺う中で、スターターセットに綴られている中身をアレンジして渡す事例もあった。サポートネットワーク会議としては、発達に支援が必要だからライフサポートファイルを作るのではなく、より多くの人に自由に使ってもらい、作成に対するハードルを下げ、より必要な人が必要になった時にファイルを手に入れている状況を作り出していけると良いと考えている。

資料5は、今年度配布した啓発チラシである。約2万枚配布した。

資料6は、令和3年度に取り組んだ啓発活動の実績である。

資料7は、令和4年度に新たに取り組む予定の活動である。

資料8は、ホームページの閲覧数である。ライフサポートファイルの閲覧数は一番下にあり、

啓発チラシの配布などを行った4月と7月に閲覧数が増加している。チラシの効果があったと考えている。

【遠藤 美里 委員】

ライフサポートファイルが、「みんなに渡ったらいいな」という考え方はとても良いと思う。特別支援関係の子どもには、手厚く浸透していると思うが、通常学級にいる子どもからの申出は、どれくらいあるのかお聞きしたい。支援が必要ではない子どもへ向けての啓発も必要だと感じた。

また、ホームページの閲覧数が令和4年4月に急増している。啓発チラシの影響かと思うが、どうしてこんなに増えているのか。

【（ひまわり発達相談センター 主査） 續 竜太郎】

ライフサポートファイルの閲覧数が4月に増えている理由として、資料5の啓発チラシを配布したことが要因だと思う。また、7月に増えている理由は、広報習志野7月15日号に、ひまわり発達相談センターの事業やライフサポートファイルの紹介を掲載していることが要因だと思う。さらに令和4年1月に閲覧数が若干増えたのは、おそらく、令和3年12月にサポートネットワーク会議の意見をもとに企画した「ライフサポートファイル作ろう会」の啓発活動の成果ではないかと考えている。

【真鍋 健 委員】

ライフサポートファイルには、苦手なことや心配事が記載されることが多くなると思うが、子どもの大好きなことや得意なことが増えてほしいと思う。そして楽しめること、安心できることから広がったり、つながったりすることで前に進んでいける、そのような媒体であってほしいと願っている。それを踏まえて、活用にあたり、二点ほど申し上げたい。

一つ目は、就学後にライフサポートファイルをどのように使うのか、そのための取り組みを確認したい。

二つ目は、窓口でライフサポートファイルを「持っていますか」、「見せてください」という声かけの実施はとてもよいことであると思うが、一方で保護者との関係が築けていない段階での声かけは、少し危険ではないかと考えているが、いかがか。

【習志野市発達支援サポートネットワーク会議副会長 大門 賢次】

作成数は、把握していない。学校での保護者面談の際に、保護者がライフサポートファイルを持参して実施したケースもあると聞いている。真鍋委員の御意見にあったように、学校側がしっかりと活用できるように、教職員の認知や理解を高めるようにしていきたい。これまでも特別支援コーディネーターや校長会等で周知を図っているが、特に通常学級の担任に向けて、実物を手に取ってもらうなど具体的な方策により理解を深めてもらいたいと考えている。また、保護者との関係性を築けてからの活用をしていくようにしていきたい。重要な課題であるため、しっかりと取り組んでいく。

【大塩 幸雄 会長】

私は教育支援委員会に出席しているが、審議対象児の半数以上がライフサポートファイルを使用している。私立幼稚園在籍者はライフサポートファイルの存在や意義を知らないのではないと思う。また、小学校の高学年児童も使用していないと感じる。公立保育所、こども園、幼

稚園、小学校低学年については、かなり普及していると思う。

【奥津 佳奈 委員】

中学生の子どもが啓発チラシをもらってきたが、幼児や小学校低学年向けの書式ではないかと感じる。そのため保護者としては、今さら案内をもらってもどうかと思ってしまう。小学校高学年以降に特別支援教育に関わるケースもあるので、大きくなってからも活用できる説明を記載するなど、いろいろなバージョンがあると良いと思う。また、中学校の先生にとって、小学校低学年の頃の様子が参考になるのかと疑問に思う。ライフサポートファイルに関しては、異性の担任には見せにくいと感じる部分もあるので、見せてくださいとの声かけは慎重にお願いしたい。

【(総合教育センター指導主事) 高橋 大悟 委員】

総合教育センターとひまわり発達相談センターと合同で作成しているパンフレットでも、ライフサポートファイルを紹介している。しかしながら、ライフサポートファイルは「作らないといけないものなのか」といった疑問をもたれることがあるようだ。普及すべきものなのか、普及したらいいものなのか、しなくてもいいものなのか、どのような定義になっているのか。普及すべきものであれば、どのような決まりになっているのか改めて確認したい。

【田村 光子 委員】

ライフサポートファイルを作成するメリットは、保護者が進学や相談機関を利用する等の際に、子どもの成長の様子や相談歴などについて一から説明しなくて済むことだと思う。ライフサポートファイルが、子どもの教育・保育に活かされることが一番の目的であると思う。同時に保護者の支援にも大切な役割を持っていると思う。このことをきちんと説明していくことが重要であると思う。

【(総合教育センター指導主事) 高橋 大悟 委員】

保護者が何度も説明するのではなく、一つのものでしっかり紡いでいくことができるのは、とても大事だと思う。小学校では個別の支援計画や、教育支援計画は必ず作成することになっている。ライフサポートファイルをできれば皆さんが作成して、乳幼児個別支援計画も個別の支援計画も入れることができるので、中身は移動するけれども、支援計画と共にライフサポートファイルがあるものと理解している。それがどこまで保護者に伝わっているのか聞きたい。

【(ひまわり発達相談センター 主査) 續 竜太郎】

7月11日に令和4年度第1回ライフサポートファイル作ろう会を実施したところ、保護者からのアンケートの中に、「使い方がわからない」、「どのようなメリットがあるのか」という声があった。発達支援サポートネットワーク会議でも話が出ていたが、年代や所属している場所等によって必要な情報や使い方が異なるため、より具体的な記入例があったほうが良いと考えている。現在ホームページに掲載している記入例は、奥津委員の御意見にあったとおり、中学生向けではない。時間はかかると思うが、年代や所属先等に応じた記入例の作成を検討している。

【松尾 公平 委員】

ライフサポートファイルは、記録をつなぐという行為自体が一番大事だと思う。私は青年期から高齢期に差ししかかっている方を専門にかかわっているが、ライフサポートファイルは必要とな

っている。40代、50代になると親が突然入院したり、亡くなられたりということが起きてくる。施設へ入所する際に、何も無いところから記入していくことはとても難しい。その意味でも、保護者の記憶がしっかりしているときから、ライフサポートファイルを活用して、記録や情報をつないでおくことが重要であると思う。

【(ひまわり発達相談センター主任指導員) 清水 郁乃 委員】

近隣市の状況を調べたところ、どの市も本市と同様に、配布はしたものの、その後につながっていないという現状があるようだ。ライフサポートファイルは、事務局であるひまわり発達相談センターが担当しているが、当センターだけの発信では弱いと感じている。子どもに関わる全ての課が意見を持ちより、より多くの人が使えらるものにしていくことでつながっていく。最終的には必要な人のためのものになるのではないかと考えている。長く継続していくことで、子育て支援課のブックスタート事業のように、市民に定着すると思う。そのためにも学校や保育施設等、市民の力添えや御意見を取り入れていきたい。

③ 市民参加型補助金「かだい提案型」の取り組みについて（きらっといっぽの会）

【(ひまわり発達相談センター 主査) 續 竜太郎】

令和2年度に策定された子ども・子育て支援事業計画には、基本施策に「障がいを持つ方々が安全に外出できる環境を整えるための啓発活動を行っていく必要がある」と位置付けられている。現在、横浜市港南区から二次利用の承諾を得た障がい理解啓発ポスター「温かく見守ってください」を使い、市内での啓発を行っている。より多くの方へ理解を広げるためには、さらなる啓発活動が必要だと考えている。しかしながら、単なる情報提供に留まると、障がいに対する誤解や偏見、差別やいじめにつながるのではないかと懸念している。そこで、市民活動団体が主体となることにより、御本人の立場、家族の立場、住んでいる地域に合った啓発方法などの様々な人の視点や気持ちを踏まえた活動が可能となるのではないかと考えた。そして、市民参加型補助金「かだい提案型」の中で、「障がいを含めた子どもが示す様々な行動への理解啓発活動」をテーマに募集を行ったところ、きらっといっぽの会に公募いただき、令和4年度の事業に採択され、活動いただいている。

【伊藤 希実子 委員】

きらっといっぽの会は市民活動団体として資料9にある通り、3つの事業を進めている。障がいからくる特性には理由があるという、私達にしかできない独自の活動を展開したいと思う。保護者に寄り添うために、チラシやポスターの作成前に、アンケートを実施する。作成したアンケートを回覧するので見てほしい。発足間もない団体なので、皆様の御助言や御意見をいただきながら、アイデアを形にしていきたいと思う。

【阿部 友理 副会長】

当事者の声を聴かずに進めることは少し危険ではないかと思っている。今困っている人の声に耳を傾けていきたいと考えている。アンケートは項目を簡略にして回答しやすいものにした。アンケートを活用して啓発活動に反映させたい。皆様の御意見をメールでいただきたいと考えている。資料9の QR コードを読み取り、ぜひ御協力をお願いしたい。

【(ひまわり発達相談センター 主査) 續 竜太郎】

資料9について確認だが、啓発チラシの作成や掲示等についてスケジュールが決まっていたら、協力できることもあるかと思うので教えてほしい。

【伊藤 希実子 委員】

既存の習志野市のポスターやアンケートの結果を参考にして、私達の思いを乗せて作りたいと考えている。チラシは10月中旬に第一稿ができあがるように動いている。小冊子は、ホームページにあるものをそのまま本にするのではなく、子どもが小さい頃のエピソードに対する保護者の振り返り等を紹介したいと思う。また、専門家の見地から、子どもの行動の理由や保護者の対応についても掲載したい。小冊子は年内中に形にするつもりだ。配布先を精査する必要があるので、今年度中に配布までできるかどうか検討している。今年度は先ず、子どもと関わりの深い大人を中心に、できるだけ対面で啓発活動をしていきたい。年明けを予定している。

教育委員会の研修会が10月にあると聞いているが、それ以降はいかがか。

【習志野市発達支援サポートネットワーク会議副会長 大門 賢次】

特別支援コーディネーター研修は10月と2月に予定している。また、校長会などでもお話いただく機会を設けていきたい。

【伊藤 希実子 委員】

子どもにとって学校の先生は絶対である。その先生が障がいのある人にどのような対応をし、言葉を発するのか、子どもはよく見ている。習志野市ではインクルーシブ保育を実施している。その体験を通して培ったことが、就学後に大人を見て違和感を持つことがないように、子どもと関わる大人に啓発活動をしていきたい。行動の理由がわかれば理解も深まり、温かく見守ることにつながっていくと思っている。子育てに悩む保護者の声を聞き取り、どのようなことを啓発したらよいか検討していく。

【田村 光子 委員】

とても良い取り組みを市も対応しながら進めていると思う。ぜひ今後も継続してほしい。お忙しい中で取り組んでおり、私も協力できる場所があればと思っている。「このような行動をしないでください」というのではなく、「このような見方をしてください」、「このようにしてください」という肯定的な伝え方で、わかりやすく啓発していくことが大切だと思う。

【大塩 幸雄 会長】

チラシ、ポスター、小冊子、どの内容も大変素晴らしいものとなっている。特にイラストが素晴らしい。添えられた文書も長すぎず、伝わりやすいと思う。予算の関係もあり、配布部数も限りがあると思うが、このように実態を捉え、PDCA サイクルに沿った取り組みは学術的である。研究として発表できるものとなってくれればと思う。地に足をつけた啓発活動を進めてほしい。

【(指導課指導係長) 近藤 篤史 委員】

大切なお子様に関わる指導課としても、不用意な言動で、子どもや保護者を傷付けることのないように肝に銘じていきたい。具体的には、指導課の特別支援教育担当者を中心に、研修等の機会を設け、特別支援コーディネーターや特別支援学級担任だけでなく、全ての教員が学

び、共通理解を深めていきたい。また、本協議会での御意見等も伝えていきたい。

【小野寺 明美 委員】

お褒めの言葉をいただき、きらっといっぽの会の一員としてうれしく思う。活動の源は、保護者に寄り添い、少しでもほっとしてほしいとの思いである。できるだけ早く完成させて、皆さんに見ていただきたい。

【(健康福祉部主幹)児玉 紀久子 委員】

令和3年度第1回の協議会后に、きらっといっぽの会の皆さんから医師会・歯科医師会への「あたたかく見守ってください」ポスターの掲示について相談を受けた。私から薬剤師会についても提案をしたが、行政からではなく、皆さんから声をかけていただいたことは、まさに協働であると思う。小冊子を見せていただき、この内容を医療の場にいる方々にも知ってほしいと思った。小冊子の数には限りがあると思うが、有効に活用できると良いと思う。三師会にも啓発できればと思う。

【(こども政策課長)齊藤 洋介 委員】

市民と行政が結びついた形で、こうした事業ができることは素晴らしいと思う。小冊子を活用した啓発活動により、これまで障がいに興味のなかった方にも関心をもってもらえたらと思う。

【(こども保育課長)佐久間 心之 委員】

市民参加型補助金「かだい提案型」の取り組みは、行政ではなかなか進まないところを市民活動団体のお力を借りて啓発をしていきたいという事業である。素晴らしいプレゼンテーションだったと思うが、市の期待もあると思う。今年度以降も継続をお願いしたい。

【(ひまわり発達相談センター主任指導員)清水 郁乃 委員】

先ほど真鍋委員より御質問のあった、コロナ禍での当センターの利用状況については、部屋の消毒等をするため、受け入れ人数を減らさざるを得ない状況がある。また、多くはないが感染を心配して利用を控えたり、体調を崩したりといったことから相談件数の減少につながっている。そのような中で、この啓発活動は、地域や家庭といった身近なところに向けており、相談したくても出ていくことが難しい方のフォローに役立つと思う。当センターとしてもできる限り協力をしていきたいと考えている。

【(ひまわり発達相談センター 主査) 續 竜太郎】

当事者向けのアンケートの実施について、当センターで協力できることもあるかと思うので、対象者はどのように想定しているのか教えてほしい。

【阿部 友理 副会長】

あじさい療育支援センターを考えている。他には習志野特別支援学校、知的障がい者団体などにも協力してもらおう予定である。アンケート用紙には、「障がいがある」と表記しており、デリケートな部分があるので、双方でよく話をして進めたいと思う。

【真鍋 健 委員】

当事者同士、同じ立場の方の経験を通して、「あるある」といった共感やほっとできることの意義が大きいと思う。その上で、家族を含めて周囲の人の見方や理解を深めていくことも大事だと思う。障がいのある人の行動やその理由についての大学の授業は、学生の関心が高いと感じる。発展させて、周囲の人から見て理解しやすい行動や、理解しにくい行動についてのアンケートを作り、小冊子にしてイラストを付けることもできると思う。

いろいろなところに波及する活動だと思う。この事業を全力でバックアップしていきたいと考えている。

(4) その他(事務連絡等)

【(ひまわり発達相談センター主任指導員) 清水 郁乃 委員】

ひまわり発達相談センター主催の市民向けの公開講座を8月4日(木)習志野市民ホールで開催予定である。「障がいって何だろう？」をテーマに、植草学園大学副学長 野澤和弘氏、千葉県中核地域生活支援センターがじゅまるソーシャルワーカー 今井出雲氏を講師に迎える。事前の申し込みが必要なので、ぜひ御参加いただければと思う。

【(ひまわり発達相談センター 主査) 續 竜太郎】

次回の開催は、令和5年2月22日(水)である。改めて御案内させていただく。

【こども部長 小平 修】

本日出た様々な意見を大切にしたい。御協議いただいた三つの項目は、今年度の市の重点施策そのものである。気が付いたことがあれば、私どもに御意見いただければと思う。

【大塩 幸雄 会長】

本日の議事は以上である。これをもって、令和4年度第1回習志野市市民協働こども発達支援推進協議会を終わらせていただく。